児童の社会的地位と性格的特質に関する一研究*

——不安傾向を中心として——

石川県七尾市立鵜浦小学校

緩 目 敬**

I 研究の意義

Rollo May は諸家の不安理論を総合して、“不安とは、その個人が一個のパーソナリティとして存在するうちに、本質的なものと解する価値が脅かされるときかもし出される気がかり (apprehension) である”と述べている。徒党時代にある児童において“本質的なものと解する価値”とは、まぎれもなく、“親和の要求”であり確証性の高い“集団への所属の欲求”であろう。学級社会や地域社会で集団に所属できない児童は、その期間が長いほど欲求不満による不安は高まるものと推察される。

ソシオメトリック・テストにみられる成員相互の特性の判断は、高学年になるにつれ人気の集中は一般に分化していく。しかし、孤立状態にある者はやはり認められる。こうして長く低い社会的地位にあるものは行動が消極的、逃避的となり、学習意欲を喪失し、劣等感を持つなど、いろいろの適応障害の原因となりやすい。しかも、さまざまな様相を示す不適応行動の動機には、不安が多かれ少なかれ働いており、不安は欲求不満、葛藤などとともに不適応行動を理解するための重要な概念である。

また、いろいろの集団の中で、リーダーはリーダーらしく、孤立児は孤立児らしく振舞う。一定の社会的地位は、一定の行動の基本的傾性としての性格特質を形成するようになる。リーダーは他者の好感的態度を背景に、望ましい性格特質を伸長させるのに対し、圧迫的・拒否的な対人環境の中にある孤立児は、けつして望ましい性格特質を伸長させていくと思われない。このように考えると、これらの動機となる不安傾向を中心として、社会

的地位と性格特質との関連を追求することは、性格形成上に有意義な資料を提供するものと考えられる。

II 目 的

徒党時代にある児童にとり、グループの中に迎えられ、一定の社会的地位と役割りを獲得しようとする欲求は、きわめて熱烈なものがある。したがって、孤立児は、学級成員から好感を持つて受け入れられ、望ましい社会的地位をもつリーダーと比較して、より多く欲求不満の状態にあると考えられ、したがって、孤立児の方がリーダーより不安傾向をもつことが多いのではないかと考えられる。

本研究では、学級内の社会的地位によつて不安傾向にちがいがあのかどうかを、質問紙法、ロールシャッパ・テストをとおして確かめてみたいと思つたのである。

III 方法と手続き

1) 孤立児とリーダーの抽出

このため、“くみかえ”“遊び”“勉強”の3場面の選択規準を用いて、ソシオメトリック・テストを無制限選択法で実施した。実施に先だち、このテストは成績を調べるものでないこと、思つたとおり正直に書くこと、見せあつてはいけなことを注意したあと、次の教示を与えた。“このクラスの人なら男の人でも女の人でもかまいません。たくさんの人を書いたからよいとか、少ないから悪いということはありません。たくさんの人を書く人もいますし、少ない人もいます。自分の思っていることを正直に書けばそれでよいのです。これは先生にお見せしませんから、思つたとおり正直に書いてください”

次にテストの一部を例示する。

1. もし くみかえがあつて あたらしいくみへ いくことになるとしたら、あなたは このくみの だれ

* The relation of the sociometric status to anxiety tendencies in sixth graders.

** by Hiroshi Enome (Unoura Elementary School, Nanao City)

と おなじくみになりたいと おもいますか。
 になりたいじゆんばんに なんにんでも かいてくだ
 さい。

2. くみかえがあつて あたらしいくみへ いくとき
 あなたは このくみの だれと おなじくみに なり
 たくありませんか。
 なりたくないじゆんばんに なんにんでも かいて
 ください。

3. おやすみのじかに あなたは このくみの だ
 れと いつしよに あそびたいと おもいますか。
 あそびたいじゆんばんに なんにんでも かいてく
 ださい。

5. がっこうで べんきようを するときに あなた
 は このくみの だれと いつしよに べんきようし
 たいと おもいますか。
 べんきようしたいじゆんばんに なんにんでも か
 いてください。

実施月日—1963年5月

被 験 者—金沢市内小学校4校6年生15学級 626名
 (いずれも学級編成以来13か月以上経過)

整理は各学級につき、規準別に整理表を作成し、3規
 準を総合して被選択数が全くない児童を積極的孤立児と
 し、同じく3規準を総合して、社会的反応強度指数* 10
 以下の児童を消極的孤立児として抽出した。また、リー
 ダーは各学級より相対的に社会測定の地位得点が高く、
 相互選択数の多い児童を男女各1名ずつ抽出した。

その結果、積極的孤立児7名(男4, 女3), 消極的孤
 立児6名(男2, 女4), リーダー30名(男15, 女15)をえ
 た。

2) 田研式不安傾向診断検査

検査は放課後、各学級ごとに静かな場所(図書室など)
 で約5分間むだ話をしたあと、手引きにしたがつてテス
 トに入つた。なお、被験者には“クラスごとにくじびき
 をしたところ、偶然あなたがたに当たつたので来てもらつ
 たのです”といい、先生には“くじびきで偶然きまつた
 のだ”と伝えるように依頼し、目的を明らかにしなかつ
 た。

実施月日—1963年8～10月

* 社会的反応強度指数は、O. Smucker の次の式に
 よった。
$$I.S.S = \frac{\sum Cr + \sum Rr}{N-1}$$

被験者—前述の2群の孤立児とリーダー
 整理方法は手引きにしたがつた。

3) ロールシャッハ・テスト

テストは授業時間を借り、児童の比較的よく慣れた静
 かな場所で約5分間むだ話をし、レポート形成後実施し
 た。

実施月日—1963年9～10月

被験者—前述の2群の孤立児とリーダー

不安測定の指標として、Eichler, R. M. の用いた15
 項目から Table 3 に示す13項目と、Cox, F. N. & Sara-
 son, S. B. の23の指標から Table 4 に示す20項目の指
 標を用いた。

図版は Hans Huber 社発行の10枚である。

IV 結 果

1) ソシオメトリック・テスト

積極的孤立児・消極的孤立児とリーダーの各規準別被
 選択・排斥数、社会測定の地位得点、および、社会的反
 応強度指数の平均値は、Table 1 のようになった。

Table 1 ソシオメトリック・テストによる積極的
 孤立児・消極的孤立児とリーダーの平均
 値の比較*

規準		積極的 孤立児 N=7	消極的 孤立児 N=6	リーダ ー N=30
く み か え	被 選 択 数	0	1	14
	相 互 選 択 数	0	0	7
	被 排 斥 数	18	3	1
	相 互 排 斥 数	3	0	0
	社会測定の地位得点	-21	-2	20
遊 び	被 選 択 数	0	1	11
	相 互 選 択 数	0	0	6
	被 排 斥 数	17	2	1
	相 互 排 斥 数	1	0	0
	社会測定の地位得点	-18	-2	16
勉 強	被 選 択 数	0	0	12
	相 互 選 択 数	0	0	5
	被 排 斥 数	17	1	1
	相 互 排 斥 数	2	0	0
	社会測定の地位得点	-19	0	15
一 規 準 平 均	被 選 択 数	0	1	12
	相 互 選 択 数	0	0	6
	被 排 斥 数	17	2	1
	相 互 排 斥 数	2	0	0
	社会測定の地位得点	-19	-1	17
社会的反応強度指数		.400	.069	.327

* 一部数値があわないのは、おのおのの項目について
 の平均値を求めたためである。

Table 2 田研式不安傾向診断検査による積極的孤立児・消極的孤立児とリーダーの比較

下 位 尺 度		積極的孤立児 N = 7	消極的孤立児 N = 6	リーダー N = 30	積極孤とリーダーの比較		消孤とリーダーの比較	
					差	P	差	P
学 習 不 安 傾 向	$\bar{x}$ SD	5.14 2.23	5.50 1.71	4.17 1.62	.97	.15	1.33	.05*
対 人 的 不 安 傾 向	$\bar{x}$ SD	5.00 1.31	5.83 1.07	5.07 1.69	.07	< .50	.76	.20
孤 独 傾 向	$\bar{x}$ SD	5.86 1.36	5.17 1.57	4.33 1.17	1.53	.005**	.84	.10
自 罰 傾 向	$\bar{x}$ SD	4.43 2.50	3.67 .75	4.20 1.81	.23	.40	.53	< .50
過 敏 傾 向	$\bar{x}$ SD	4.71 1.75	5.67 1.70	4.43 1.93	.28	.40	1.24	.10
身 体 的 徴 候	$\bar{x}$ SD	5.43 1.92	5.83 1.95	4.73 2.49	.70	.30	1.10	.20
恐 怖 傾 向	$\bar{x}$ SD	5.86 1.81	6.00 1.73	5.13 1.96	.73	.20	.87	.20
衝 動 傾 向	$\bar{x}$ SD	5.14 1.73	5.83 1.35	4.93 2.20	.21	.45	.90	.20
総不安傾向偏差値	$\bar{x}$ SD	50.00 10.07	52.50 6.37	45.93 8.84	4.07	.20	6.57	.05*

* P < .05

** P < .01

Table 3 Eichler, R. M. の不安指標による積極的孤立児・消極的孤立児とリーダーの比較

項 目	積 極 的 孤 立 児 N = 6	消 極 的 孤 立 児 N = 6	リ ー ダ ー N = 22	積極的孤立児と リーダーの比較				消極的孤立児と リーダーの比較			
				t	P	t(transf.)	P	t	P	t(transf.)	P
反 応 総 数 - $\bar{x}$	23.17	14.83	23.91	.18	.45	.48	.35	2.72	.01	2.93	.005**
SD	14.18	8.03	6.67								
反 応 拒 否 数 + $\bar{x}$	.50	1.83	.05	1.41	.10	2.28	.025**	3.62	.001	3.70	.001**
SD	.76	2.19	.20								
全 体 反 応 - $\bar{x}$	5.83	7.33	10.41	1.31	.15	1.79	.05*	.86	.20	1.45	.10
SD	2.41	4.27	8.17								
異 常 部 分 反 応 + $\bar{x}$	3.50	.69	.82	1.70	.10	1.63	.10	< .50		< .50	
SD	6.66	.94	1.37								
人 間 運 動 反 応 - $\bar{x}$	1.17	1.00	2.82	1.45	.10	1.07	.15	1.98	.05	1.49	.10
SD	1.07	1.15	2.62								
陰 影 反 応 総 計 + $\bar{x}$	.08	0	.57	< .50		< .50		< .50		< .50	
SD	.17		.53								
純 粋 形 態 反 応 + $\bar{x}$	69.67	77.17	49.41	2.19	.025	1.88	.05*	3.07	.0025	2.96	.005**
SD	20.66	18.52	19.00								
色 彩 反 応 総 計 - $\bar{x}$	1.00	.50	2.11	1.39	.10	3.13	.0025**	2.37	.0025	3.51	.001**
SD	2.02	.71	1.56								
動 物 反 応 + $\bar{x}$	58.50	63.00	50.86	2.42	.025	1.09	.15	1.87	.05	1.77	.05*
SD	17.59	19.06	11.68								
動 物 部 分 反 応 + $\bar{x}$	4.50	1.67	2.05	1.78	.05	.65	.30	< .50		< .50	
SD	5.25	1.49	1.77								
人 間 部 分 反 応 + $\bar{x}$	1.00	.67	.50	.93	.20	1.06	.15	.31	.40	< .50	
SD	1.41	1.49	1.03								
解 剖 反 応 + $\bar{x}$	1.00	.17	.64	.68	.30	.60	.30	< .50		< .50	
SD	1.15	.37	1.10								
平 凡 反 応 - $\bar{x}$	4.75	3.33	5.57	1.24	.15	.41	.35	3.19	.0025	1.99	.05*
SD	1.47	1.82	1.36								

注 +は増加, -は減少が不安の傾向を示す。

* P < .05

** P < .01

Table 4 Sarason, S. B. & Cox, F. N. の不安指標による
積極的孤立児・消極的孤立児とリーダーの比較

項	目	角変換によるパーセントの平均値			積極孤とリーダー の比較 P	消孤とリーダー の比較 P
		積極的孤立児 N=6	消極的孤立児 N=6	リーダー N=22		
反 応 拒 否 数	+	7.58	18.42	.83	.15	.0005**
全 体 反 応 数	-	30.34	40.60	41.70	.01 **	.45
切断全体反応数	-	5.74	15.10	20.76	.01 **	.10
全 体 反 応 総 数	-	31.66	49.54	50.90	.01 **	.35
平 凡 反 応 数	-	27.59	25.28	28.46	.45	.25
色 彩 反 応 総 計	-	4.43	6.84	16.29	.01 **	.005**
運 動 反 応 数	+	23.99	22.15	35.55	<.50	<.50
無 形 態 反 応 数	+	9.04	0	11.00	<.50	<.50
不良形態反応数	+	33.43	48.57	26.79	.15	.001**
第一次形態反応数	-	5.74	9.04	18.80	.01 **	.01 **
第二次形態反応数	+	4.52	4.89	15.87	<.50	<.50
性・解剖反応数	+	7.99	2.15	5.79	.30	<.50
立 体 反 応 数	+	3.59	2.15	7.92	<.50	<.50
表面材質反応総計	-	2.15	0	10.00	.01 **	.001**
反応数1のカード数	+	32.46	38.04	21.53	.15	.05 *
反応数3以上のカード数	+	30.96	12.07	35.99	<.50	<.50
反応時間5秒以下	+	8.30	12.81	9.96	<.50	.35
反応時間15秒以上	+	59.28	64.11	59.43	<.50	.30
総反応時間25秒以下	+	0	9.46	.84	<.50	.05 *
総反応時間75秒以上	+	50.78	62.32	63.11	<.50	<.50

注 十は増加，一は減少が不安の傾向を示す。

* $P < .05$ ** $P < .01$

表から明らかなように、積極的孤立児はリーダーと比較し、被排斥数が多く、被選択数は全く見られない。また、消極的孤立児は、被選択数、被排斥数ともにいずれも少なく、社会的反応強度指数も.069と非常に小さい。

2) 田研式不安傾向診断検査

8個の下位尺度と総不安傾向偏差値につき、3群の平均値を求め、積極的孤立児とリーダー、消極的孤立児とリーダーの差の有意性の検定をした結果、Table 2のようになった。なお、検証尺度において、全員に真実性が認められた。

積極的孤立児は、対人的不安傾向を除いた7個の下位尺度と総不安傾向偏差値について、リーダーより不安傾向が高く、統計的には孤独傾向にのみ $P = .005$ で有意差が認められた。

消極的孤立児は、自罰傾向を除いた過敏傾向、身体的徴候など7個の下位尺度と総不安傾向偏差値に高い不安傾向がみられ、統計的には、学習不安傾向、総不安傾向偏差値に $P = .05$ で有意差が認められた。

3) ロールシャッパ・テスト

Eichler, R. M. の指標13項目について、各群の粗点

の平均値を求めt検定をしたが、粗点の分散が大きいため粗点を開平変換し、変換点についてさらにt検定を行なった。

その結果は、Table 3に示すように、積極的孤立児は12項目においてリーダーより高い不安傾向がうかがえ、反応拒否数、全体反応、純粹形態反応、色彩反応総計の4項目に統計的有意差が認められた。

消極的孤立児は8項目にリーダーより不安の高い傾向がみられ、反応総数、反応拒否数、純粹形態反応、色彩反応総計、動物反応、平凡反応の6項目に有意差が認められた。

Sarason, S. B. らの不安指標20項目について、総反応数に対する各指標のパーセントを求めたが、歪みが大きいため、角変換によるパーセントを求めた。その結果はTable 4に示すように、11項目に積極的孤立児の不安傾向が見られ、全体反応数、切断全体反応数、全体反応総数(W+ux)、色彩反応総計、第一次形態反応、表面材質反応総計の6項目に有意差が認められた。

消極的孤立児は、13項目に不安の高い傾向がうかがえ反応拒否数、色彩反応総計、不良形態反応数、第一次形態

反応数、表面材質反応総計、反応数1のカード数、総反応時間25秒以下の7項目に統計的有意差が認められた。

V 考 察

以上のように、社会的地位の低い積極的孤立児や消極的孤立児は、田研式不安傾向診断検査、ロールシャッハ・テストにおいて、リーダーより不安の高い傾向がうかがえた。

積極的孤立児は、1規準平均5名を選択し4名を排斥しているが、学級成員のだからも選択を受けず、17名から排斥を受けている。このような排斥はおとなしい児童には考えられない。かれの行動の他者への刺激価値は、社会的反応強度指数.400とリーダーのそれより高い。それはすべて排斥によるものであり、かれが学級集団の中でなかまと積極的にまじわろうとするが、かれの行動特性が集団の規範にそぐわないため、このような排斥を受けたものと思われる。かれが集団に受容されない行動をすればするほどその周囲は圧迫的・拒否的となり学級集団から疎外され、孤立するようになる。孤立児が他者のそのような態度を認知するとき、のけ者としての自己を認知し、孤独感をいだくようになる。また、人格特性に関し、孤立児はリーダーより情緒的不安を内的な努力により処理し、容観的かつ冷静にながめることができず、知的にも内的安定性、共感性、感受性の豊かさにおいても劣っている。積極的孤立児の不安は、こうしたかれ自身の人格特性とかれに対する拒否的環境との輻奏により、かれの集団への所属の欲求が満たされず高まつたものと思われる。

消極的孤立児は、みずから5名を選択し、4名を排斥しているのに、1名から選択され、2名から排斥されているにすぎない。かれは学習場面においても、遊びの場面においても目立たない存在で、積極的に集団にまじわらず、成員との感情の交流もあまりないため、集団内成員間の相互理解がなされず、そのために中性的な無関心が多く示されたものと考えられる。また、かれは対人的共感性、内的安定性に劣り、抑制的で、社会的協調性においても劣っている。物事を客観的に見ることができず、主観的に事態を着色するため、対人関係の場におい

てリーダーより不安を持ちやすく内閉的になりやすいと思われる。また、このような児童は、学級社会で目立たないため教師にも忘れられがちであり、長期間そのような状態にあることが考えられる。リーダーは級友と行動することにより、心的エネルギーを発散させているのに対し、孤立児は過敏なため感受性が強く、ささいなことまで気になり、他者のなにげない行動も気になる。物事をきめるのも容易でなく、現実社会において適応が困難となり、逃避的となる。ひつこみ思案なかれの心的エネルギーは心中にうつ積された状態にあり、それらエネルギーと、前述のような人格特性により不安が高まつたものと思われる。

参 考 文 献

- Cox, F. N. & Sarason, S. B. 1954 Test anxiety and Rorschach performance. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 49, 371—377.
- Eichler, R. M. 1951 Experimental stress and alleged Rorschach indices of anxiety. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 46, 344—355.
- 古旗安好 1962 交友関係の診断, 性格心理学講座3 金子書房, 171—197.
- 金沢大学教育心理学研究室編 1963 友人関係における問題児について 第10回北教ゼミ
- 兼子宙・小川一夫 1962 学校における人間関係の診断, 性格心理学講座3 金子書房, 198—231.
- 片口安史 1963 心理診断法詳説, 牧書店.
- 南博 1960 社会心理学, 光文社.
- 長島貞夫 1962 児童社会心理学, 牧書店.
- N. R. F. Maier 池田貞美, 高橋守雄訳 1962 欲求不満の心理 誠信書房.
- Rollo May 1963 不安の人間学, 誠信書房.
- 鈴木清他 田研式不安傾向診断検査の手引, 日本文化科学社.
- 田中熊次郎 1962 児童集団心理学, 明治図書.
- 田中熊次郎 1962 ソンオメトリの理論と方法, 明治図書.

(1965年4月26日原稿受)㇏

THE RELATION OF THE SOCIOMETRIC STATUS TO ANXIETY TENDENCIES IN SIXTH GRADERS

by

Hiroshi Enome

Unoura Elementary School

The purpose of the present study was to test the hypothesis that isolates with low sociometric status would reveal more indications of anxiety than would leaders with the high sociometric status.

A sociometric test consisting of following three criteria, 'grouping', 'play' and 'study' was administered to 626 sixth graders out of 15 classes to select the following three groups of subjects: 'rejectees', 'neglectees' and 'leaders'. The general anxiety test and the Rorschach test were then given to all the subjects.

The findings are as follows:

The results of the general anxiety test standardized by TAKEN revealed that both rejectees and neglectees were more anxious than leaders. There was a statistically significant difference in the te-

ndency for loneliness between rejectees and leaders. Likewise, there were significant differences in the anxiety tendency for learning and in the total anxiety tendency between neglectees and leaders.

The anxiety index by R. M. Eichler and one by S. B. Sarason and F. N. Cox were adopted as the anxiety indices in terms of the Rorschach test. It was shown that rejectees and neglectees were more anxious in their responses with these indices than leaders.

The higher degree of anxiety by isolates was interpreted to show dissatisfaction of need for belongingness to the group, on the basis of the interwoven effects of their personality characteristics reflected on their responses to the Rorschach test and the environmental condition in which they were pressed and rejected by their peers.

EXPERIMENTAL STUDIES ON THE INTERMEDIATE STAGE OF NUMBER CONSERVATION

by

Yasuko Ito & Gyioo Hatano

Tokyo Metropolitan Institute for Educational Research *University of Tokyo*

Three empirical findings concerning the responses of the intermediate stage of number conservation are to be presented and discussed from the view-point of the change of dominance between perceptual and numerical-inferential cues.

(A) Responses on conservation tasks given

to Ss of our previous experimental education of number conception were examined for i) consistency of conservation responses to various sub-items, ii) reliability of conservation responses with a 2-week interval. Four out of 8 conservation sub-items given were as follows: After S recognized the eq-